

スポーツ委員会提言と回答について

2019年12月9日

渡辺、山口、高瀬、田原

提言案 「人生におけるスポーツの価値と科学的エビデンス」(前回の提言案2をもとに)

1. 幼少期の多様なスポーツ経験が脳の発達や生涯にわたるスポーツ実践につながり、また高齢期に至るまでのあらゆる年齢におけるスポーツの実践が健康保持や脳の発達・老化防止に寄与する。よって幼少期に多様なスポーツ経験を促すことが望ましい。(国民と文科省に向けて、エビデンス利用の効果)
2. スポーツの価値は多様であり、勝負に勝つことだけが重要ではない。人生を通してのスポーツの価値を高め、社会に貢献するためには、障がい者を含め多様な人たちの参加と指導者を含む関係者の若手への移行が急務である。そのためには、科学的エビデンスを尊重して有効活用するトレーニングに移行することが必要であるが、科学的エビデンスの限界を超えた部分には補完的かつ合理的に体験主義(ナラティブ)を活用する意味を多くのスポーツ関係者が認識できる仕組みが必要である。(スポーツ関係機関に向けて、エビデンス利用の促進)
3. 科学的エビデンスについて、実験室でのデータを外挿して推論することはできないため、現場でのデータ収集が必要であるが、現在はさまざまなデータが散在しているため、これらのデータを集めて一元管理し、包括的分析を可能とする体制が必要である。また、これらは省庁や機関の枠を超えて実施する必要がある。(スポーツ庁、文科省、厚労省、内閣府、スポーツ関係機関に向けて、エビデンス作成の促進)
4. スポーツの歴史的背景を考慮し、スポーツが様々な人々の人生を通して多様な価値を提供し、社会的価値を高める観点から、eスポーツはスポーツの一部であると定義できる。個人と社会にとって e スポーツの価値を高めるためには、依存症を防止する対策が必要であり、電子機器とネットワークを利用した依存症対策が有効である。この依存症対策を国は法的に制定する必要がある。(厚労省、総務省、ゲームメーカー向け)
- ~~4. スポーツの価値について国民を含めさまざまな関係者が共有するためには、メディア報道の果たす役割が大きい。科学的エビデンスに基づく新しいスポーツのあり方や最前線のトレーニングなどを報道し、スポーツが時代とともに変化していることを広く共有することが必要である。(メディア機関・関係者に向けて、エビデンス利用の促進)~~

提言目次案

1. はじめに (2 ページ)
2. スポーツの意義と歴史的变化 (3 ページ程度)
 - ・ 語源：デポルターレ (deportare, de=away, portare=carry) 人間の生存に必要なことから一時的に離れる、気晴らしをする、休養する、楽しむ、遊ぶなどを意味する
 - ・ デポルターレの実現→高い階層の人々の楽しみ (ノブレス・オブリージュ) →大衆化→勝負 (競争) →多様な社会貢献 (社会のためのスポーツ)
 - ・ e スポーツに触れる
3. スポーツの価値 (3 ページ程度)
 - ・ 多様性 (個人から集団まで、勝負から協働、健康と不健康(肉体と精神)、選択の自由) 子供の頃には多様なスポーツに触れ、発育発達に配慮して行うと良い (ユニセフ子供の権利とスポーツの原則参照)
 - ・ 包含性 (障がい者の参画、子供から高齢者まで)
 - ・ 心と体の調和実感、選手と観客の一体感、目標達成による成長
4. 科学的知見によるスポーツの変革 (3 ページ程度)
 - ・ 選手時代の経験と生涯の健康 (トップアスリートのセカンドキャリアを含む)
 - ・ 高齢期における健康への影響
 - ・ 各年齢層におけるスポーツの脳への影響
 - ・ 体験主義主体から科学的エビデンス主義主体へ
 - ・ 指導者・選手の体験主義 (ナラティブ) と科学的エビデンスの調和
 - ・ メディアの影響
5. 科学的エビデンスの意義と限界 (3 ページ程度)
 - ・ 実験室でのデータを外挿して議論はできない⇒現場でのデータ収集が必要、
 - ・ 短期的成果は長期的成果につながらない
 - ・ 科学 (的エビデンス) の限界
 - ・ データを集めて一元管理し、包括的分析をすることが必要 (データの体制整備)
6. 新たなスポーツ「e スポーツ」の定義と依存症対策 (3 ページ程度)
 - ・ e スポーツをスポーツとする定義
 - ・ e スポーツの現状と拡がり (人口、市場、社会的意義)
 - ・ e スポーツによる依存症と他の依存症との関係
 - ・ 電子機器活用による新たな対策
7. 提言 (2 ページ)

回答案

1. 日常生活の中で自然にスポーツに親しむこと（「スポーツ・イン・ライフ」）が、個々人の心身の健康、体力の増進さらには学習・認知能力や対人関係力等の伸長にどのように寄与・貢献するか、ひいては、社会全体の便益（例えば医療費抑制、経済効果など）をもたらすかといった基本的問題に関する最新の科学的知見の整理

⇒川原先生、福永先生のデータを整理、スポーツの脳への影響のデータ（提言の1. 2.）

⇒幼少期（選手時代）のスポーツ経験が脳の発達と生涯の健康に好影響を与え、また高齢期のスポーツが健康寿命を伸ばす、よって生涯スポーツをすることが個々人の健康と社会全体にとって重要

2 従来のスポーツ界の伝統・慣習や独特の組織文化・精神文化等との関係も含め、スポーツに参画する者、関係業界が拡大・変化していく中で「スポーツの価値」をより高めていくための科学的知見の活用といったスポーツ界と科学との関係の在り方の検討

⇒柏野先生のデータを整理＋「スポーツと暴力」での内容（提言の2. 3.）

⇒科学技術の進展により、スポーツを科学的に分析することが可能となっている、これらを活用して、科学的エビデンスに立脚した練習やコーチングを進めることで、経験を主体としたスポーツをより合理的に変えることができる。

3 従前、我が国のスポーツは、心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進等を目的・効果とした「身体活動」と通念されてきたところ（スポーツ基本法前文参照）、科学技術の進展、情報技術環境の変化が「スポーツの価値」にどのように影響するかといった今日的論点に関する科学的知見の整理

⇒歴史とeスポーツの議論（提言4.）

4 「スポーツの価値」の普及を図るスポーツ政策において、科学的知見をいかに政策に反映させるか、またEBPM（Evidence-Based Policy Making：証拠に基づく政策立案）を推進していくための体制整備（スポーツ庁と関係学会との連携の在り方を含む）に関する提案

⇒データ共有の必要性とそれを活用する体制の提案（提言3.）

回答目次案

1. はじめに

2. 審議依頼を受けた各事項に関する検討

2-1) 日常生活におけるスポーツと社会との関係に関する科学的知見の整理

2-2) スポーツ界と科学との関係の在り方の検討

2-3) 科学技術の進展、情報技術環境の変化に伴うスポーツの価値の変化に関する科学的知見の整理

2-4) EBPMを推進していくための体制整備に関する提案

3. 総合的所見

スケジュール

- 2019年12月初 目次と執筆分担を決定
 - 12月初めから1月初め 執筆
- 2020年1月末 提言一次案と回答一次案の完成
 - 2月末 提言案と回答案の完成
 - 3月初め 査読に提出
 - 3月26日 幹事会で承認
 - 4月～6月 学術フォーラム（回答の手交式も同日）

※学術フォーラム候補日

- 2020年4月30日（木） （幹事会：3/26）
- 2020年5月7日（木） （幹事会：4/15）
- 2020年6月4日（木） （幹事会：5/14）
- 2020年6月18日（木） （幹事会：5/28）